創世ホール通信 No. 299

催し案内＋文化ジャーナル
2019年12月1日発行■北島町立図書館・創世ホール
電話：088-698-1100　ファクシミリ：088-698-1180
〒771-0207　徳島県板野郡北島町新喜来字南古田91

徳島クリエーターズマーケットvol.32

12月7日(土)・8日(日)
午前10時～午後5時(8日は午後4時まで)

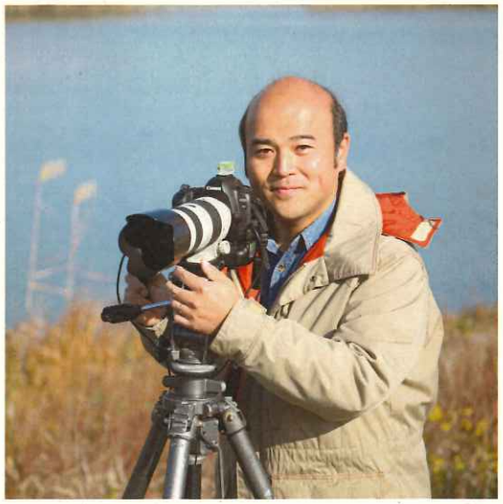
会場：2階　ギャラリースペース　**入場無料**
主催：徳島クリエーターズマーケット事務局
(川久保☎080-3162-2234)

■全国津々浦々から凄腕の「モノづくり人」が集う、徳島県内最大級のハンドメイドマーケット、今回も北島町で開催します！■発起人は川久保貴美子さん。脱力系癒しキャラ「ししゃもねこ」で知られる、本町在住の造形作家さんです。■自分だけのオリジナルハンドメイドグッズが作れる体験型ワークショップも充実！お気に入りの一品が見つかるかも！皆様、ぜひご注目ください。

北島町青少年健全育成講演会

12月13日(金)　午後1時30分～

講師：**宮武 健仁**（写真家）
演題：「火と水の生み出す風景」を探して発見したもの
会場：3階　多目的ホール　入場無料
主催：北島町青少年健全育成町民会議
(☎088-698-9812)


【講師近影】

【講師紹介】
1966年大阪生まれ、徳島育ち。
紀伊半島で水をテーマとして撮りはじめ、郷里の吉野川を中心に四国の水のある風景を撮り歩く。
2009年に桜島の噴火を見て以来、大地のマグマの「赤い火」の迫力と、火山国の日本の各地にある地球の活動が感じられる風景と、その近くを流れる清流と、そこに暮らす光る生き物たちを追って全国を旅する。
桜島の赤く光る溶岩や、ホタルの緑に輝く川、ホタルイカの青く輝く浜など光景が評価されニューヨークへも招待され個展「日本の夜と光」を開催。
近著「Ｓｈｉｎｅ 輝く命」（青菁社）
「日経ナショナルジオグラフィック写真賞2013」グランプリ受賞

創世ホール名画鑑賞会vol.31
『モリのいる場所』

令和2年1月18日(土)　①午前10時30分　②午後2時(2回上映)

会場：3階　多目的ホール
上映作品：**「モリのいる場所」**(2017年)
出演：山﨑努・樹木希林　ほか
監督・脚本：沖田修一
入場料：一般・大学生
前売1,000円　(当日1,300円)
小中高生・シニア(60歳以上)
1,000円(前売・当日共通)
主催：創世ホール名画鑑賞会実行委員会
(☎088-698-1100)

■31回目となる今回は、日本映画界を代表する名優・山崎努と樹木希林の共演作「モリのいる場所」を上映します。
■時流に無頓着で、庭に集い来るちいさな生き物たちを描き続ける画家・モリ(山崎努)と、彼を支え続ける妻・秀子(樹木希林)の、何でもない、けれどちょっとおかしな一日が始まる――■「画壇の仙人」と呼ばれた画家・熊谷守一のエピソードを元に紡がれる、心あたたまる夫婦愛の物語。ご期待下さい。

「もっと生きる、もっと描く。」
―画家・モリ(94歳)

「ああ、そうですか。」
―妻・秀子(76歳)

文◎化◎ジ◎ャ◎ー◎ナ◎ル

だれが明朝体を作ったのか
～その誕生と歴史⑤

書体設計家、活字書体史研究家★小宮山博史

講演採録★2019年３月16日★北島町立図書館・創世ホール３階多目的ホール

■（図版はウィーン版の柳亭種彦『浮世型六枚屏風』絵草子を投影）ちょっと全体を見せてください。これはウィーンで作られた活字です。こういう所に記号が入っていて面白いでしょ。ずーっと読んできて、ここまで来ると末尾に記号があって、次はどこに移って読めばよいか表示しています。この絵と文章を、よく覚えておいてください。この本は柳亭種彦の作です。この人は、もともとは二百石どりの旗本で、その人が書いた絵草子なんですけど、お見せしているのはウィーン刊行版です。なかなかきれいな印刷面ですよね。

■次の図版、お願いします。これが柳亭種彦の元版で、江戸で出版されたものです。東京大学の蔵書で、傷みがひどく、凄く汚れています。

■開けてみてください。同じ絵ですね。それで文章が入っている。江戸の版本はやや大きい。つまりサイズを比較するとウィーン版は、やや小さいんですけど。こんなに文字が入っている。ここにマークが入っていて、ここまで読んだら、次はここから読みなさいという印です。

■では次の図版。江戸で刊行された柳亭種彦の『浮世型六枚屏風』は、たぶんポルトガルかオランダの貿易船に乗せられて向こうに渡ったと思うんです。柳亭種彦の江戸版を活字でもって復元していこうとすると、例えば「い」ならこれだけの数が必要になってくる。

■活字というのは１つの文字が１つの字形であることで成立するシステムなんですよね。だけど、あの江戸版を活字でもって復元するとなると、同じ字でもこれだけの数が必要になってくる。

■僕たちはこれを読めますからいいんですけど、例えばウィーンの印刷局の人たちが、いったいどの字を使ったらいいのかというのは分からない。もしかすると、その江戸版の形に合わせてこれだけ活字を作っていって、それを組み合わせたんでしょうけど、これは活字のシステムとしてはダメなんですよね。最小単位で最大効果というのが、活字の特徴なんですけど、この活字は簡単さではなく、複雑でもって最小効果ってことになる。

■これは、ひらがなですね。はい次。こんな風になってくる。連綿体もありますね。では、なんでこんなことをしたのかよく分からないんです。ただ単に柳亭種彦の本文を読ませるんだったら、普通の活字を組めばいいんですけど、これをした理由がよく分からない。非常に珍しい作り方です。ひらがな、カタカナ、漢字という複雑な日本語活字の歴史の珍しい例です。

■では、次。ここからお配りしたコピーをちょっと見てください。ここに「美華書館告白」って書いてある。「告白」と言っても愛を告白しているわけではなくて、これが販売広告です。ここには、１号、２号、３号、４号、５号、６号、全部で６サイズの活字が出ています。これは、上海にあった美華書館の広告です。中国で出された漢字週刊誌の中にこれが入っていた。上海のプレスビテリアン・ミッション・プレス（北米長老会印刷所）が出した広告です。

■今まで見てきたように、漢字活字は実際には色んな所でたくさん作られてきたんですね。そのうちのいくつかが、この美華書館に集約された。これだけ色んな大きさのサイズのものを見せている活字の広告見本はこれ初です。ここからこれがどこのものかというのを見ていきたいと思います。これは少し後に掲載された広告ですが、２号が一つ削られて空白になっています。他の活字は同じものです。

■（建物を撮った図版を投影）美華書館というのはいったいどういう所なのかというと実は、こういう建物です。これは北京路といって、黄浦江に流れ込む蘇州川に沿って走る大通りです。そこにあった３階建ての木造の建物を使っていました。

■これは1800年代後半に撮影された写真だと思います。これは前景ですね。はい次。（内部の仕事風景の図版）これは鋳造室。活字を鋳造しています。後ろ側にいくつか機械が並んでいますが、これが鋳造機ってやつです。真ん中に職人さんが並んでヤスリでゼイヘンを削っている非常に珍しい写真です。

■（次の図版）これは漢字活字ではなくて、欧文、ラテンアルファベットの活字を組む部屋、欧文植字室。（次の図版）これは印刷室ですね。（次の図版）はい、これもそうです。

■ちょっと、写真がぼやけていますけど動力は電気を使っていると思いますけど、電気がないときはどうしたか。これは別の印刷会社ですけど、牛を使って印刷機をまわしたという記録が残っています。「ぐるぐる牛が回っている。俺は畑を耕さないで、なんでこんなことをしなければいけないんだ」っていう詩を中国人が作っています。

■（別の図版）はい、これが製本室。

■（建物の図版）でこれは北四川路に作られた印刷工場です。蘇州川の北、戦前に日本人がたくさんいた虹口〔ホンキュウ〕と言われているところに1900年頃作られた。この左斜め後ろに、昔の北部日本人学校がありました。今も建物がそのまま残っていて、上海の中学として使っています。その前にキリスト教の教会が今もそのまま残っています。

■（建物内の図版）これが活字の植字室。ここに、たくさんの活字がありますね。ここで活字を拾って組む。全部で６段あります。この内の中央の２段が最も多く使われる活字が入っている。上下が次。左右はあまり使われていない字、という風に決められています。全体の文字数でいうと、6664字。だけど金属活字ですから、１頁に600字文字があれば、活字は600本いります。皆さんの使うデジタルフォントはパソコンの中に１つ入ってて、それを何度も繰り返し使ってますけど、金属の活字の場合には、必要な文字数全部が必要になります。ですから例えば、これがある一定のサイズ、本文のサイズだと、十何万本とか二十万本とかの数が必要になってきて、床が抜けるぐらいの重さになります。印刷所では、こんな風にして作っている。

■この美華書館というのが、実はすごく日本に影響を及ぼしています。つまりアヘン戦争の結果、清朝はキリスト教の禁教を解きます。その結果、中国には、たくさんの宣教師が入ってきて、印刷所を作って聖書を印刷する。その中で最も大きな印刷所が美華書館という長老会のものでした。この小さな活字見本は１号の元になった試作見本です。マラッカで、サミュエル・ダイアというイギリス人が作ったものが、この見本の１号。つまりこの１号はイギリス人が作ったものです。1837年。

■聖書を開いてみます。これは扉ですけど、ここにダイアが作った活字が使われている。それからこれもダイアが作った４号活字。サミュエル・ダイアっていう人は、もともと印刷工ではなかったんですけど、活字を開発しました。なかなか大変だったんですけど、開発する途中でもって、マカオかどこかで病死します。

■じゃあ次。これが１号活字ですね。キリスト教の宣教師がどんどんどんどん入ってきて、こういう漢訳聖書を発行していく。これもアヘン戦争の結果です。この中に２号っていうのが右頁の下にあります。２号というのは、実はドイツ～プロシア人のバイエルハウスっていう人が作った活字です。ちょっと右上がりの、コピーを見ていただいたら分かりますけど、右上がりで細身の書体です。

■（図版）これは２号。これはドイツ人が作ったもの。もう本当に形としては非常によく出来ています。これも活字の元は金属に彫ってます。

■英字だと一番画数の多いものは、ＷとかＭですけど、漢字は画数が物凄く多いから、金属に彫るのはとても大変です。それでもくよく出来ています。非常にバランスがよくなっています。

■（図版）これが、その２号を作ったバイエルハウスという人が作った楷書体なんですが、図版の３字目「石」という字があると思うんですけど、これが転倒しています。これで、活字だって分かります。バイエルハウスという人は、こういう楷書活字も作っています。あまりうまくないですけど。

■（次の図版）これは、凄い珍しくて、こちら側がドイツ人の作った２号、そしてこれがアメリカ人の作った出来のいい２号。水平垂直になっていて、現在の明朝体の原型になっています。１冊の本の中で２種類を使うっていうのが、珍しい印刷物でした。

■（次の図版）これは４号ですね。ちょっと時間が残り少なくなってきたので、先に行きます。

■（『地球説略』の図版）これは３号なんですけど、寧波〔ニンポウ〕で印刷された世界の地理・歴史書です。それでこれは、日本版なんですけど、この本は日本でも復刻印刷されています。それでここんところ記憶しておいてください。「一千八百五十六年」と書かれています。

■これが元版なんですよ。「耶蘇降世」ていうキリスト教の言葉が入っている。これはまだアヘン戦争以前ですので、清朝がキリスト教を禁教にしていた頃、この本が出るんですけど、これを日本でもって復刻したものです。

■ただし日本ではまだキリスト教は禁教です。キリスト教がＯＫになったのは明治になってからなんで、そういう、キリスト教に関係ある単語や文章をうまーく削って復刻するという、非常に珍しい本が『地球説略』という本です。

■元版の扉下に出版したところの名前がありますが、「寧波華花聖教書房刊」です。日本版は「寧波華花書房刊」と、「聖教」を抜いてあります。これは序文で２号を使っている。左頁が３号ですね。日本版は３巻本ですけど、元版は２巻本なんです。

（以下、次号に続く★採録・文責＝小西昌幸）